

日中民衆交流の可能性と課題

両国民衆の確かな未来への展望を紡ぐために

- 8月2日（金） 6時30分～9時 （午後6時開場）
- 大阪市大学梅田サテライト 101号教室
大阪駅前第2ビル6階（北区梅田1丁目2-2-600 TEL 06-4799-3700）

（パネラー）

メイン報告者： 李 妍焱（Li Yanyan／駒澤大学文学部社会学科教授）

「中国における市民社会の展開の視点から」

サブ報告者： 水野 博達（Mizuno Hiromichi／当大学院・共生社会分野特任准教授）

「高齢者福祉・介護に関わる南京市社会福祉サービス協会との交流から」

（コーディネータ） 李 捷生（Li Jiasheng／当大学院・アジアビジネス分野教授）



【南京大虐殺遭難同胞記念館の彫刻群より】

両国の文化的交流や経済的な繋がりが深まる中で、しかし、一方、日本の近代以降の海外侵略の歴史的反省、つまり、歴史認識については、日本社会では、この間むしろ時計の針を逆まわしにする機運が強くなっています。

こうした逆風を変えていく力の一つは、過去を見つめ、未来を展望する日中民衆の自覚的・自主的な交流の前進であるといえましょう。この可能性はどこにあるのか、また、その意義はなにか。具体的にどんな民衆交流が構想され、実行できるか……。『中国の市民社会』（2012年11月、岩波新書）の著者・李妍焱さんをお招きして、討論を広くおこなえたらと企画しました。友人を誘って気軽に参加下さい。

日本と中国の民衆の自主的な交流の可能性やその意義はどのようなことか？

近年の日中関係は、靖国神社への閣僚の参拜、あるいは南京虐殺事件・日本軍従軍慰安婦に関わる日本の政治家の右翼排外主義的な発言が続いた後に、尖閣諸島（釣魚台）の領有権を巡る両国政府の対立が激化する中で、きわめて困難で危険な状況が広がっています。

1972年の国交回復以前は、「日中（中日）友好協会」が窓口となって、日本の民間・民衆レベルと中国人民との交流が進められました。国交回復後は、政府間や企業・資本間の関係が発展し、経済的連携が急速に広がりました。中国における「改革開放」の展開によって、こうした傾向は拡大してきました。

- 参加資格など：関心のある方は誰でも歓迎します。事前申込み不要、参加費無料

主催：大阪市立大学大学院創造都市研究科都市共生社会研究分野

（「ケア労働に関わる日中比較研究会」準備会）

<連絡・問合せ先> e-mail mizuno@gsc.osaka-cu.ac.jp 担当者・水野